別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏　　名　　陳　敏

論　文　題　目

サバイバルの詩学

――中国第一世代の女工をめぐるナラティブとジェンダー・ポリティクス―

論文審査担当者

主査　名古屋大学大学院人文学研究科　教授　　星野幸代
委員　名古屋大学大学院人文学研究科　教授　　丸尾　誠
委員　名古屋大学大学院人文学研究科　准教授　鶴巻泉子
委員　摂南大学　名誉教授　瀬戸　宏

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

〔本論文の概要〕

本研究は、清末から 1950 年代にかけての「中国第一世代の女工」をめぐる小説を中心とするナラティブを対象として、そのイメージの変遷を考察したものである。中国第一世代の女工とは、アヘン戦争後の外資工場の急増に伴う安い労働力の需要に応じた女性たちを指す。本研究は、女工をめぐる文学テクストをある程度当事者の声を反映するものとして扱い、それらの言説を内面化した女工たちがそのイメージ形成に共犯的な役割を担っていることを前提としている。序章では、こうした女工表象をめぐる政治と権力構造の存在を指摘している。

第一章では、清末における女工をめぐる言説を考察した。下層女性への職業教育の提唱は、清末の実業救国論や重商主義のもとで女性を動員するためのナショナリズム的言説の一つであった。こうした社会背景を踏まえれば、実業家・思綺斎の著した政治小説「女子権」および「中国新女豪」は女工振興のための作品として解釈でき、女工が富国強兵の想像を託す装置として機能していたことが分かる。

第二章では、五四新文化運動期を代表する男性作家の一人、郁達夫の短篇「春風沈酔の夜」を分析した。本作は、作家の政治的な立場を女工に託し、女工を資本家の搾取に対し社会変革をおこす可能性のある他者として理想化している。一方で、女工は男性知識人にとって恋愛対象ないし性的な客体にはなり得ず、むしろ性的に堕落したものとして差別する言説が読み取れる。

第三章では、1920 年代後半から1930 年代にかけて「金（かね）」をキーワードとして女工を描いた小説三篇、廬隠「魂は売ることができるか」、葉聖陶「民間に在りて」、杜衡「人と女」を分析した。それらの小説において、女工は＜新女性＞をめぐる言説の代表的な形象となるが、現実の女工は貧困の中で日々を生き延びることに精一杯であり、革命する主体には成長できない。女工は労働運動におけるジェンダー・ポリティクス、家父長制と資本主義の二重の抑圧などによって常に周縁化され、排除されている。

第四章では、モダニズム作家吉行エイスケの散文集『新しき上海のプライヴェート』（1932）を対象に、女工と近代的な都市空間との関係性を論じた。日本の中国侵略のもと、同時代の中国作家の語りでは、女工の生活体験や労働者内部のジェンダー・ポリティクスはもはや注目されなくなっていた。吉行エイスケは、上海事変を以て「革命的支那」と「暗黒街」に分節化された上海というトポスの暗部で、秩序を撹乱する存在として女工を描いている。彼の語りは帝国日本の植民主義と資本主義による搾取と支配を当然視する一方で、女工たちが都市の消費者として主体性を持ちえた一瞬をとらえている。

第五章では、生涯に渡り工場労働者を描き続けた女性作家・草明の創作における女工表象と空間の関係を考察した。草明は、初期創作においては作家と女工という階層

の壁を越え、同郷者ないし女性同士の連帯感、田舎から都会へ出た女性の不安や葛藤といった共通点を一人称語りによって浮かび上がらせている。第一世代の女工たちは一旦家庭に戻るが、50 年代末の急進的増産「大躍進」運動を以て生産の場に復帰せざるを得ず、人民共和国建設期に女工をめぐる語りはさらに周縁化されていった。草明も共産主義のイデオロギーに傾倒し、重工業建設という国家の目標に応じて男性労働者を英雄として設定し、女工の語りを扱わなくなった。

以上の通り本研究では、半世紀にわたる女工の経験をめぐるナラティブの変遷を明らかにした。大勢として、女工表象の語り手は男性が多く、女工を資本主義や帝国主義に抑圧される病的な身体、或いは性的に搾取される客体として描き、闘争の主体から排除してきた。だが様々なナラティブを追うと、貧困の中で働く女工という単純化されたイメージではなく、重層的な女工の経験が浮かび上がる。労働で賃金を得る過程で自己を形成し、時代と社会の中でサバイバルしていく女工の成長物語は、資本家や男性労働者からの抑圧と搾取を受けつつも、様々な可能性に満ちた過程でもあった。

〔本論文の評価〕

本研究は清末・民国期から人民共和国建国後 1950 年代までの中国における女工の歴史社会的な位置づけを踏まえて、文学作品における女工の形象を扱っている。これまで近現代中国文学における女性形象の研究はほとんど知識人、学生、農民、家庭婦人に焦点があり、女工に主眼を置いた本研究は、その空白を埋める貴重な研究業績であると言える。女工を固定化したカテゴリーではなく共約不可能な存在としてとらえ、女工自らイメージ形成に共犯的な役割を担ったとみなし、女工表象をめぐる社会および労働の場におけるジェンダー・ポリティクスを重視するといった問題設定、方法論も意欲的かつ適切である。一国主義的な次元を離れ、歴史社会的文脈を十分に踏まえたテクスト分析は、社会の深部の洞察に達し得ている。

その上で、審査員からは下記の様な意見が出された。女工を描く数十の作品リストの中から、分析対象としたテクストの選択基準は必ずしも明確ではない。各章の内容は完成度が高いものの、章によって社会学的な分析と作品論、作家論の比重が異なるため、一本の論文としてはある程度整理した方が良かったであろう。またジェンダー、セクシュアリティ、女性性という用語の差異、およびタイトルの「詩学」の定義など、申請者の認識をより明快に提示した上で論を展開することが望ましい。

もっともこれらはいずれも発展的課題であり、本研究は従来見逃されてきた女工という表象の複層性、重層性を浮かび上がらせ、近現代中国文学研究分野において斬新かつ着実な成果をもたらした。また社会思想や哲学の理論を咀嚼した上での複眼的な論述からは、研究者としての優れた資質がうかがえた。

以上により、審査委員一同、本論文が、博士（文学）の学位を授与する水準に達していると判断した。